歌集

浜木綿のかげ

山野井

浜木綿の花

山野井昌子

歌集

浜木綿のかげ

心の花叢書

昭和四十九年六月二十日印刷
昭和四十九年七月　一日発行

定価一五〇〇円

著者　山野井昌子
〒338　埼玉県与野市大戸八七五
TEL　〇四八八―三二―八七三一

発行者　小笠原婦久子
印刷所　神谷印刷株式会社
東京都豊島区高田一―六―二四
338　埼玉県与野市与野五八三―一六
発行所　きさらぎ書林
TEL　〇四八八―五二―九五五八

序

序

「岩をも通す」と言ふ諺があるが、どんな人が、どんな信念の下に、それほどの力を現はしうるものか、と思ってゐた事が、何んと私の周辺、然も極く身近にあるのを知って驚き且うれしく、思ったことであった。

山野井昌子さんと、短歌の御附合ひをする様になってから、早や十二年あまり、初めの四五年の間は、見舞に伺ふことも遠慮してゐたが、その内御会ひする機会が、都合良く稔り、心の準備を整へて、初めて与野の御宅に伺った。横臥のままの、昌子さんに御逢ひしたが、その病状の余りにも、重度の身障者であるのを知って、月々送って来る、詠草に依って、知る限りの作者が、この方であるのかと、それは驚く外なかったのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

御両親に承った、昌子さんの発病以来、成長の過程、智慧附きから、知識慾の進むにつれての、本人と御両親と、一体となっての苦心、ましてその頃の昌子さんの、努力の姿などすべてが、涙なくしては聞くことが、出来なかったのである。

私はよく同門の歌友から、「ちっとも歌が出来ません、この頃旅にも、出かけませんので」、と云ふ贅沢な訴えを、聞く時があるが、その時はいつも、昌子さんを引合に出して、「山野井さんを御らんなさい、寝た切りの病苦の中を、一間の病室だけの視野を、大切に見詰めるだけで、毎月あれほどの作品を、発表して居らるるのではありませんか」、と言ひ続けて来たのである。

昌子さんの持つ心の視野は、まことに静かで広い、自らを鞭打って、運命の病苦を乗り越えるといふ、強靱な信念が、岩をも通す征矢を引く程の、昌子さんの今日を、築いたのである。

昭和三十七年の春の或る日、私は山野井菊次郎さんの訪門をうけた。色々の話を承った後、「私でお役に立つ事でしたら」と云ふことになって、それから昌子さんと私との短歌の上の交りが始ったのである。そして昌子さんを信仰の道に誘ふ方があったらば、より以上に昌子さんを、幸福に導くことが出来るかも知れん、と思ふようになった。私自身は一介の、信の薄い仏徒であるが、私の周辺にH夫人と云ふ、カソリックの信者が居られて、その日常の慎しさに引かれて居たので、H夫人に「昌子さんを、信仰に導きなさい」と、何度か耳打ちした。其事が実現して、昌子さんは寝たままで、入信されたと聞いた時は、昌子さんの為めに安心した。果せる哉昌子さんの作品が変った。充実した。それは昌子さんの、強い力の中に、信仰の高い磨きが、融け込んだが為である、と信じてゐる。昌子さんの短歌作品は、文学としての高さを持ってゐる。狭い視野に充実した、詩藻の花が咲き湛へてゐる。批評の如何なる俎上に

も、上り且つ堪へ得る内容を持ってゐる、と断言する。常臥四十年の昌子さんが、女性として身内に感じた、悲痛な歎きの数首の如きは、正しく王朝の女流歌人の、作品に比して、勝るとも劣るものでない、ことを確言して昌子さんの運命の不幸を、共に歎き、更に行く後半生の幸福を、この歌集を読んで下さる皆さんと共に、祈り度いと思ふ。

昭和四十九年三月　桜の季に未だ遠いころ。

湘南鵠沼閑雲艸房にて

安藤　寛

目

次

序　安藤　寛
笑　顔　二
わが歌　七
盆踊り　一〇
友の旅　一三
夕べの憂ひ　一六
車　騒　二〇
月　光　二四
元　朝　三〇
皆既蝕　三三
朝　日　三六
枕辺の花　四〇
甥の仕ぐさ　四二
祈る心　四六
花の雨　五〇
祝ひカード　五三
傷癒えて　五八
青　空　六二
水　仙　六五
木の芽　六八
浜木綿の影　七二
元日の雨　七八
隣家の児　八二
ピアノの音　八五
薔　薇　八八
早春の花　九四
南の鳥　九九
来訪者　一〇二

熟るる実　一〇六
差し水　一一〇
潮の香　一一四
受洗　一一八
古りし時計　一二四
聖歌　一二八
胸の思慕　一三一
子等の旅　一三五
断髪　一三八
口をもて　一四二
歳末　一四五
新しき装ひ　一四八
電話　一五〇
一身　一五三
レモンの香　一五六
若きシスター　一六〇
ミサの鐘　一六三
新年のミサ　一六八
ひそかなる迷ひ　一七三
朗詠　一七五
神の恵み　一七八
みどり児の手　一八三
友の誠　一八六
神の光　一八八
跋　林川幸子　一九一
あとがき　山野井昌子　一九四

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

昭和三十六年

笑　顔

夕膳の鍋料理より立つ湯気の向かうに母の笑
顔が見ゆる

窓越しに夕焼の空うるはしく部屋まで淡き紅
に染まれる

遠くに朝の電車の走る音聞えきたりぬわが臥
す部屋に

待ちまちし十姉妹の雛孵(かへ)りたり指先ほどの赤
裸にて

手乗り鳥作らむと雛を取り出だす籠の親鳥に
罪めくごとく

十姉妹の雛にさし餌をする母の口を開きてひと匙ごとに

さし餌して育つる雛にやはやはと真白く小さき羽生えて来ぬ

兄の一家思ひもかけず訪ひ来たる春雪今日は音なく降りて

臥したるまま読み進む本に昂ぶりて首の疲れを今日は覚えず

快き(こころよ)読書のあとの疲れにて聴くメロディは胸に沁み入る

聴きなれぬ調べの拍子幾つかと首振りてみる手萎への吾は

チョンチョンと畳を歩く可愛ゆさよ白き手乗
りのわがキンカ鳥

暖かに臥す部屋の障子開くる日の多くなりた
り視界ひらくる

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.